

令和4年度第2回島根県総合教育審議会

日時：令和4年11月15日（火）

10：30～12：00

場所：島根県市町村振興センター 大会議室

○会長

それでは、早速始めたいと思いますが、まず1回目をぐるっと回そうかなと。自由な発言の時間もあるかと思いますが、ICTのことだけじゃなくて、いろんな角度からのご意見をいただければと思いますけど、とりあえずテーマを決めて1回ご意見をいただくという形で、これまでにいただいたご意見の資料もありますので、というふうに進めたいと思いますが、何か、よろしいですかね。

そうしましたら、ICTについての議論をしてみたいと思います。

○委員

10年前の専門家でございますが、すっかり卒業しております、現在は、高齢者、認知症のグループホームを、介護士の一人として、一昨日も夜勤をやってきました。介護しながら、3つほど県と市のほうから仕事をいただいています。県のほうからいただいているのが、「健康とメディアの講師派遣事業」というのがありますが、毎年5回ぐらい、県内の小中学校を訪問して、とりわけスマホの活用に関する、使いすぎの課題であるとか、危険性であるとか、ネットに潜むいくつかの問題とか、そういったことを講演をして、子どもたちと話をし合っている、そんなことをやっています。また、市のほうからは、「夢未来塾」といって、キャリア教育って言いますか、仕事をする楽しさっていうことを、企業家の観点から話をさせてもらってます。もう一つ最近、先月からやっていますのが、松江ビジネス専門学校のMOS、マイクロソフトの検定を受けるための授業の非常勤講師をさせてもらったりして、この3つをやっています。

そういう中で感じるのが、まずスマホの活用等々に関してなんですけれども、「寝る時間が少なくなるよ」というようなことを以前は話をしていたんですけど、最近の切口、子どもたちに一番訴えたいのは、「君たち、社会に出たときの給料、いくらぐらいになると思う？」と、給料の明細を見せながら、「せいぜい20万ももらえたらいいだろ。でも、おじさんの末娘が、アメリカ人と結婚してロスにいるんだけど、彼の給料いくらだと思う？年間1,500万を超えて、1億を超える家を30歳で建てているんだよ。どうしてだ

と思う？」という話から入っています。「それを一番心配しているのが、総理大臣だよ。」と言って、「それは何が違うかという、パソコンやスマホ、ITの利活用、この部分で一番差が出る。だから、小中高で今、プログラミング教育等々が始まっているのだろ。」というところから、今入っています。

本当に、今日こうして、非常に重要な部分なんですけれど、子どもたちの将来、この若いときの教育環境をどう準備できるのか、また、それをどう理解させていくのか、とっても将来、給料という言い方をしましたけど、ものすごく関わってくることなので、皆さんとまたここで意見を十分闘わせて、島根県のいい環境にしていきたいなと思ってまいりました。以上です。

○会長

ありがとうございました。

ICTの授業を「稼ぎが違う」から入るなんて言うのは、あまり聞いたことがないかなって思いました。いろいろご異論、ご意見もあろうと思いますが、ここで一つ一つやらず、とりあえずざっと今ぐらいの感じの流れで回してみても、それから皆さんの中で、ご意見をお願いしたいと思います。

○委員

ICT教育が、教員にとって心地いい働き方なのかどうか、現在いらっしゃる教員すべての方が本当に使いこなせていらっしゃるんだろうかと思ったり、それから、私が隠岐なんですけど、生活の水準というのがずいぶん違っていて、本当に苦しい思いをして公立の小学校に通っている子どもさん、保護者の方もいらっしゃいます。そういった方が、例えば、機器の購入はすべて公費で負担されるのか、もし故障したときはどうなっていくんだろうかとか、そういうことも思ったり、それから、情報がいろいろ飛び交う中で、情報が漏洩するとかそういうことは100%あってはならないことなので、それも万全にできるかどうかと、私はだいたいこういうことは苦手なので、いろいろ思っていました。ですから、機器はあくまでもツールであって、それが教育の目的になってはいけないんじゃないかなと、すごく思います。

私事で申し訳ないですけども、8月に主人を亡くしました。その時に、ドクターヘリではなく美保基地から日赤の先生がわざわざ乗ってきてくださいました。主人は指を無くしたもんですから、その先生は、本当に、本当に温かい言葉を添えてくださいながら、残された1本の指を持って飛行機に乗ってくださった。その時の夫の笑顔見たのが最後の笑

顔でした。私は、その指を握ってくださっている先生のお姿を見て、この場で亡くなったほうが幸せかもしれないと思いました。

先日私は、研修会（しまね教育の日フォーラム）に出していただいて、江津工業の生徒さんが、「僕は教員になりたいです。」と発表後おっしゃった。この先生との関係、すごく良い関係ができてるんだなと感じました。そして、もしこの生徒が指が無くなった時どうなるんだろう、この子は工業高校で働きたいと言っているのにどうなるんだろうと、主人のことを想いながら、いろんなことが脳裏をかすめました。

人間が苦しかったり、辛かったり、そういった体験をし、その中で人に出会って、「この人なら」というような、今を生きる力、そして明日に向かって生き抜く力をやっぱり教育現場では教えていくこと、教えなくてはいけない、そういう社会が必要ではないかと感じながら、この前の教育の日フォーラムに参加させてもらって、すごく感慨を持ちました。ですから、このICT教育は、ともすれば、隠岐のほうは本当に重要視されると思うのですが、教員ももしかしたらあまりいらなくて、情報通信技術に長けた方がいらっしやったら、そのほうがいいのか、いろんなこと、これからの教育現場は変わらざるを得ないし、変わっていくんだろうと、いろんなことを考える昨今でございます。

○会長

ありがとうございました。

非常に大切な論点で、今般誰も言わなくなった、言うことさえできなくなったICT推進の是非ということ、そのものを問われたんですね。せいぜい僕らは注意点ぐらいを言うんだけど、進めることそのものに関しては、誰も何も言えない状態になっている。そのことの善し悪しということも、どこかで考えないといけないよ、と言う話をいただいたと思います。「ICTもやるけど、これも忘れちゃいけないよ」と言う話なのか、推進そのものの是非の話をしているのかということは、結構このスタートの時点で大事なかなという話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

○委員

ICT教育の話ですけれども、みんな小っちゃい時からスマホは使いこなしています。パソコンは触ってなくても、スマホは持っていない子はいません。上段にかざした教育がどうのこうのって言うより、本当に情報は、結構スマホから得て、何でも知ることができますよ。それと、学校行かないとどうなるんだろうと、学校現場での教育にしか携わってらっしゃらない方ばかりかと思えますけど、敢えて申し上げれば、学校に一日たりとも行

かなくても、ちゃんと大人になるし、立派に生きていけるということは、それは分かっていたと思います。要は、子ども本人、あるいは若い子本人がどうしたいか、どこでどうやって学びたいか、それはいわゆるテキスト的な知識だけではなくて、本当に小学生で、中学生で、新聞配達ができるんですね。「新聞配達をしたい」って言ったら、うちの子の校区の校長がですね「新聞配達しちゃいけない」と。でも、世の中と、社会と関わるのに新聞配達しかなかったんですね。中学校の1年生の頃から、その断られた中学校にも、朝早く起きて、雪の日もですね、絶対言いたいですけど、新聞を配達していました。その校長先生は「するな」と。でも私は本当に感謝したんですけど、新聞配達の仕事をしているおじさんは、ずっと雪の日なんかも、心配してですね、黙ってうちの子の後ろを付いてきてくださってました。私は学校よりも、世の中の人にいろんなね、うちの子学校行かなかったので、「学校よりも社会の人のほうが広いね」って言ったんですよ。それは、忘れられないです。今も居場所をやってますけども、学校に合わなかった子が多いです。「学校一日も行かなくても、こうやって生きていられるよね」っていうこと。小学校の時に知っていたら、いじめや、辛い学校に行かなくて済んだら、たいていそれが、私のところに来られる方はですね、精神科にかかってましてね、薬を飲んでいるんですよ。カウンセラーのところに行き、そしてなぜか何とか相談室とか行って、心の医療センターもだめみたいなの、そんなことは必要ないと思うんですね。本当にこれも言いたいです。その子ども本人がどう思って、どうしたいかということについて、うちにたどり着いてくるまで、「誰にも聞いてもらえなかった」って言っています。それは、ずっとこういうところで申し上げてきているんですけども、やっぱり教育現場に関わっていらっしゃる方であればあるほど、学校に来ない子に対して、学校が合わない子に対しても、理解がないなというふうに思っていますので。そして、ICTの話ですが、スマホはみんな使いこなしています。そこから本当にいろんな知識も得、多分スマホがなかったら「ここまで」っていうふうには思うところで、スマホの弊害みたいなことも言われていますが、これがあるからこそ、学校に行かなくても、ずっと家にいても、そこそこの生きていく力とか、いろんなことを知ることができるのかなっていうふうに思っています。学校に行かない子しかほとんど知らない状態で過ごしていますので、そういう学校がない場所にはうちでずっとやっている子どもたちについて、ひとこと言わせてもらいたいと思って参加させていただきました。

○会長

ありがとうございました。子ども本人をいつも一番大事にされていて、その中で、この20年、30年の間にスマホが発展したおかげで、学校に行かないっていう選択肢に対して、非常に大きな武器になってきたんだなっていうふうに僕も思いました。そのことをまさにおっしゃられて、ありがとうございました。

○委員

今回、ICT活用の教育ということで、高校1年生の子と自学室で出会う大学生とお話ししたことを一つ伝えたいのと、我が子の中学3年生の子のことを通して感じていることの2点をお伝えできたらと思っています。

まず高校生の子のほうですが、「どうやって使っているの」と聞いたら、健康観察とか、先生から「今日の授業の要点をまとめたものを共有してもらえ」とか、「レポートが出せる」とかというようなことで、「じゃあ、授業でどうしているの」と言ったら、「授業では使えない」と。「なんで使えないの」と言ったら、「Wi-Fi環境がないからだよ」と。二クラス分くらいが一斉に使うと、小中同じだと思うんですけど、「十分に活用できない」と言っていました。「ほかにはどうなの」と聞いたら、「先生が使い方を知らないから進まない」とのことでした。高校1年生の使ってきた子たちのダイレクトな意見かなっていうふうに思います。「いつごろこれがどこでも使えるようになるのか」みたいな話をしました。その話をいっしょに大学生と私が聞いていたんですけど、その大学生は、「自分は英語をとっているんで、英語っていうのはたくさんの教材があって充実しているから、あとはパワーポイントみたいな形で使うんだけど、それをみんなのタブレットでは共有しないですね」と言いました。「じゃあ、それどうするの」と聞くと、「電子黒板に映すんです」と。「そうか、じゃあ、タブレットを一人一台持っている意味ってなんだろうね」という話を、その大学生としました。

これから先、教科書を全部買った上にタブレットを置いて、ノートを置く授業をこの先続けていくのか、アプリをダウンロードしてやっていくのか、やっぱり教科書がいいって言う子はそれを上手に使ってやっていくのか、それを子どもたちが選択をして授業をしていく、自分で受けていく体制の一つの便利なものが多分ICTになると思いますが、「それをどういうふうに子どもたちに、いつのタイミングで、そういう授業の仕方ができるんだよって、誰が教えていくんだらうね。その選択をいつさせてやるんだらう」とって、大学生が言うんですよね。「それをするためにICTを入れるんじゃないの」とって、「子どもたちが自分でどういうふうに学びたいかを考えて学べるような環境をつくるためにす

るんじゃないの」って、大学生が言ってました。そんな話を聞きました。

もう一つ、中三の子ですが、発達障がいがあって、読み書きが難しく、今支援をしてもらっています。そうなった時に、これから目指す高校があるとすると、「支援できません」と高校側から言われました。特別支援を受けている子は、タブレットを使って授業ができるけど、うちの子はグレーゾーンなので、グレーの子は特別支援教室には入れない。だからタブレットを使って授業もできない。けど、教室でもタブレットは使えない。読み上げしてくれれば楽かもしれないけど、それもできない。すごい苦しいところで、そういった子たちが使えるようになってはいかないのかと思います。テストで読み上げを、ボタンを押して読み上げてくれればテストが受けれるのに、それができない。息子の話を聞いていると、「10分読んだら、最初の1文は忘れるんだよ」って言うんですね。「じゃあテストで、読むことが大切なのか、答えが知りたいのか、どっちなんだろうね、テストって」って話をして、なんかそういうところでもっと上手に、本当に子どもに何を求めているのか、子どもがどうしたいのかというところのツールとして、タブレットが使えればいいんじゃないかなっていうふうに、ずっと悶々としながら、子どもたちと関わっています。

○会長

ありがとうございました。

つい先日も、うち入試やったんですけど、入試の時に、どういうやり方がいいのかわからない。今、読み上げ機能のことおっしゃったんですけど、それを使って良いとか悪いとかって話なんだろうかっていうことを僕自身思っているんですよ。ただ、それを言わなくなったら、試験の会場ってどうなるんだろうかっていう話があって、難しいなって。大学でさえそうですから、高校とか中学の現場で、障がいがあるとかないとかいうことによって線を引いて、使って良いとか悪いとかいうことを学校が言うのか言わないのかわからない、非常に大事なテーマですよ。自分の暮らしやすさとか、自分の情報の処理のしやすさとかいうことを、子どもたちがどう選ぶかという問題と関係しているんですよ。こういうことすごく簡単そうで難しい議論なんだと思いますね。これも考えてみたいと思いました。

○委員

私の会社自体はバスの関係を受け持ってまして、スクールバスなんかもいろいろさせていただいて、結構、小学生、中学生、高校生、大学生と、子どもと接する機会は多いかな。子どもさんは、スマホはもう、ほとんど持っている状態。バス停でバスを待ってい

る時に、5、6人のグループが会話をしなくて、それぞれスマホとにらめっこして、時間をつぶすというような環境、ほとんどのところがそんな感じに見える。小学生とかってというのは、話をしたり、いろいろふざけっこしたりいうコミュニケーションがとれとる中、一長一短と言いますか。メリットのほうを考えると、この先の人生、海外とかプログラマの道とか、詳しくないのでわからないんですけど、デメリットのほうを考えると、子どもがスマホとかそういうのを触っていて、読み書き、漢字、字のほうですよ、パソコンとかスマホの扱いは僕らも教えてもらったりする立場なんで、得意とは思うんですけど、字のほうがなかなか「もうちょっとだね」っていうようなことで社会人になってしまったんで。で、やっぱり、いろんなところでサインすることで、年賀状なんかはパソコンでやっているんですけど、それ以外のところで自分の名前を書く、自署、署名っていうのは、この先多分ずっと続くと思うんですよ。ハンコがないというのは最近そういう感じになってきたんですけど、サインっていうのは必要なかなと思っていて、そのへんもICT活用していくとノートがなくなる。ノートがなくなったら書くことができない。そうなるのだんだん、字のほうに衰えていくんじゃないかという心配があります。そういう情報をいつでもどこでも、すぐに手に入る。僕も子どもとかによく言うんですけど、目や耳から取り入れた情報っていうのは1割程度しか記憶に残らないと。実際に体験して取り入れた知識というのは9割ほど身につける。だから、「これはどういうことだ」って、すぐスマホで調べるんじゃなくて、実際こうこう、こうやったら、理科の実験じゃないですけど、「この液体とこの液体を混ぜたらこういうガスが発生するよ」ということを本当にやって、そういうことをした人の話はすごく説得力がある。でも、紙で見て「これはこうなんだよ」って言われてもあまり説得力がないし、自分が体験していないんで、それ以上のことを言われたら、「いや、そこまでわからない」ってことになってしまうんで、いろいろ体験もしながら、スマホとかパソコンを活用して、子どもの選択肢で、就職しても3か月で離職する、実際体験していない、いろんな情報だけでこの仕事をやってみようかな。で、今、職場体験なんかが、中学、高校とあると思うんですけど、ああいうところで一回体験すると、これは俺に合うかなとか、私には向かないかなとかがある程度判断できて、就職しても年数が積まれるんじゃないかってことも思うあたりがあります。以上です。

○会長

ありがとうございました。

この2年くらい学生は本当オンライン面接だったんで、オンライン面接のやり方を新

しく大学で指導しなきゃいけない状態でした。彼らも不安だったんでしょうけど、なかなか難しい問題だなと思いました。採用される側もきっと大変だろうなと感じました。

○委員

今日の開催に当たりまして、Y o u T u b eの動画を事前に勉強しまして、島根のICTの活用の様子ですね、視聴させていただきましたけれども、動画自体がエモーショナルな感じがして、いいなあって思いましたし、学齢であったりとか、立場とか環境の違いの中で、しっかりと活用が進んでいるなっていう、そういったイメージはすごく受けました。ただ、そういった中で、やはり特に小学校とか中学校というのは、しっかりと活用が進んでいるなというのは、印象としてありました。で、高校はですね、進んでいないことはないんですけども、やっぱり小学校や中学校の活用の流れというものを、高校は止めてはならないのかなというふうに、すごく感じました。これは、ICTの活用に限らず、例えば、英語のパフォーマンステストみたいなどころ一つとっても、小学校、中学校はわりとしっかりとやるけれども、高校はまだまだペーパーテスト中心での評価があったりだとか、そういったところがあります。でも、これは高校が悪いとかという話ではなくて、当然高校は大学入試ですとか、その先の就職を見据えてのご指導がありますので、なかなかそういったICTをしっかりと活用するだとか、パフォーマンステストをしっかりとやるだとかっていうのは難しいんですっていう、そういった事情、立場もものすごくよくわかりますので、やっぱり大事なことは、小学校、中学校、高校それぞれの立場の中で、お考えであったりとか、状況、事情があるんだっていうことを、地域の中で小学校、中学校、高校という属性を越えて連携をしていくってことがすごく大事なんじゃないかなというふうに思いましたので、ICTなんかもそうですけど、島根県の中で小学校、中学校、高校がしっかりと接続しながら、子どもたちをどう育てていくのかというところを、現場レベルでしっかりと話をしていくことが大事なんじゃないかというふうに思っているところが一つ。

もう一つだけお伝えさせていただけたらなと思うんですけども、冒頭、教育長も「ICTの活用は2段階ある」というお話しをされていました。本当にそのとおりだなというふうに思っておりまして、基本的に学校の先生方っていうのは、50分の授業の中でいかに多くの情報を伝達するかっていうところに、すごく重きを置かれる部分が旧来的な授業では当然ありましたので、なので、板書の時間がもったいないから、ICTを活用して、その時間をもうちょっと捻出していきましょうという、ステップ1、フェーズ1なのかなというふうに思いますし、じゃあその空いた時間の中で、思考、判断、表現力、こういっ

たものを磨いていく時間を捻出していきましょう、であったりだとか、そこからさらに学習効果につなげていくためには、例えば生徒の振り返りみたいなものをICTを活用してしっかりやっていって、自分の振り返りを、過去と比べて比較をしていたりだとか、友達同士で比べてみたりだとか、そういった振り返りみないなところにおいても、ICTっていうのはすごく活用できるんじゃないかなというふうに思っていて、そういった面では、島根はすごく可能性があると思っていて、なぜかと申しますと、キャリアパスポートですよ。数年前まで、全国でキャリアパスポートの事例なんかありますかって聞かれたら、だいたい島根の事例をいつもご紹介していたんですね。そういった形で、ICTか否かというのはありますけども、しっかりと振り返っていくところの文化っていうのは、島根っていうのはあるんじゃないかなというふうに思っていますので、それをうまくICTを絡めながらやっていくと、さらに進化、発展していくんじゃないかなというふうに感じたところでございます。

○会長

ありがとうございました。

一つはICT活用の教育の連続性ということで、これはICTだけでなく、多分、小、中、高ってつながっているようで、つながっていないところがありますので、まさしくそのことと、プラス大学まで行くと本当につながってないなっていう感じになるんですけども、そのあたりICTっていうところ一つの軸を置くことによって、そのへんを考えようっていうことと、一つのツールとしてICTを使いこなすことの中に、本当は子どもたちの自己成長とか振り返りとか、そういった成長の力にICTを結びつけていくといったお話しをいただきました。

○副会長

委員の皆様の話を聞いて、子どものICT環境、うちの子から聞いてたのとちょっと違うなとか、日頃大学生から聞いているのとちょっと違うなあなんて思いながら聞く場面もありましたので、子どもたちの状況もまた様々だなということを改めて感じているところです。

そんな中で、3点話そうと思います。大きく、弊害といいますか、今学生が育ってきた中で、恐らくデジタルから受けたマイナス面ということと、大学での教育でうまくいっている例、国際交流の点と、自分の学び、研究のために、目の見えない方々とコンタクトをとることがあるんですが、デジタル機器、インターネットがどれだけ役に立っているか

など思うこともありましたので、その3点でと思います。

まず、学生の、私から見てのマイナス点ということになるんですが、そもそも大学生、若者は、どれだけデジタルに関する端末、メールとかSNSとか、ワードで資料を作ろうとか、そんなことちゃんとできてるのだろうか、使いこなせているのだろうかという、使いこなせていないと思っているんですが。でもお手軽さだけは享受しているので、なんか勉強でも、人との付き合いでもお手軽に終わらせようとしている面が多々あるんじゃないかなと思っています。よくある例としては、大学教員が連絡はメールでしますよとか、学内のパソコンで見れる電子掲示板でしますよと言っているのに、指示どおりにしていない。なんでかって言うと、「メール見ません」って平気で言っている学生がいる、少なくないです。これなんかは、せつかく環境に恵まれているのに、使っていない例かなと思ったりもします。他にも例えば、教育実習に行く学生がたくさんいます。教材を作るのに、プリントを刷ってみようとか、掲示物を黒板に貼ろうとかするんですが、絵を使いたいとか、グラフ、図表を使いたい。そんな時に、「作れませんでした」と言うので、何でかと言うと、「インターネット上に自分の思うような絵や図がないから、それをコピーできないから、資料が作れません」と言ってくる。「それだったら手書きすればいいじゃん。元のデータや参考になる資料もあるんだから、絵や図表くらい自分で書け」って言ったら、「あ、そういう手があったか」と初めて気付くようなところです。なので、それもコピーが当然、自分で作らないみたいな、それが当たり前になっているのかなと、残念に思ったりします。もちろん、ワードやパワポも、大人の教員、職員のほうがよく使いこなせているかなと。

「こんな機能があったの知りませんでした」なんて言っている若者も多くいます。資料づくり、勉強等々でお手軽に済みます。まだそれだけならいいんですけど、もっと問題なのは、コミュニケーションもお手軽に終わらせようとしているかなと思います。メールでやりとりすると、往々にして誤解があったり、時に相手の方を怒らせてしまうことがあるんですけど、多分教職員の年代になると、「しまった」と思ったら、すぐその人に会いに行って、説明したり、必要に応じて謝ったりすると思うんですが、学生は最後の最後まで、「すいませんでした。すいませんでした」ってメールで終わらせようとして、ますます相手の方を怒らせて、それが学外の方とのやりとりだったら、ちょっとこっちも介入して、私まで「一緒に謝りに行くんだけん」とか言って、やっそこ、さっそこ、学生がメールから離れて謝りに行くことに気付いたりとか。まあ、そこまでの人は少数なんですけど、そんなことも起きてたりします。なので、勉強もコミュニケーションもお手軽になってきている。

勉強とコミュニケーションの省エネをしているんじゃないかと、私は心配しているところ
です。このへんマイナス面として、感じたりしているところです。一方で、それだけじゃ
なくて、世の中全体としては、やっぱりすごく役に立っていると思います。大学の中で良
い面としては、国際交流、今、コロナのせいで海外に行けないとか、コロナがなくても時
間がうまくやりくりできないとか経済的に厳しい人は、昔だったら留学もできないし、海
外の方と話なんかできなかった、難しかったと思うんですが、今はオンラインで海外の方
と交流するのが容易になっています。そこで、海外の文化や言語を学ぶ学生が非常に増え
ています。良い面の一つとして、強調したいと思います。あともう一つが、目の見えない
方とのやりとりなんです、これは私が最近、目が不自由な方とやりとりすることが多い
んですが、ほとんどLINEもしくはパソコンのメールでやっています。と言うのが、パ
ソコンやスマホなどほとんどの端末は字を読み上げてくれるので、私などは気軽に、目の
不自由な方に連絡がとれるようになったなと思っています。昔だったら、多分相手の方の
時間を気にして、電話をしてなんていうことをやっていた。コミュニケーションが今より
も難しかったんじゃないかなと思っています。コミュニケーションが広がったなというこ
とも日々感じているところです。ICT教育というより、ネットとデジタル端末というこ
ろでお話いたしました。日々思っていることは以上です。

○会長

ありがとうございました。

大学生のお手軽は、私どももよく感じるところで、大学では学生の懲戒の責任者なの
で、このいわゆるコピペ的なものが始まってから、レポートもですね、手軽さって言うか、
よその文書を持ってきて、ネットから拾うって言うけど、拾ってきたものを届出もしない
で自分のものとして使ってしまうなんていう、そんな感じでの懲戒案件がすごく増えてい
ますね。それを検出するための検出ソフトまで使ってやっているような状況ですね。

視覚障がいの方の話が出ましたけども、読み上げソフトって使われるのすごいですよ
ね。僕なんか絶対聞き取れないような倍速でバァッと読み上げソフトを使って聞かれるん
ですよ。あの能力はすごいなと思いました。

○会長

じゃあ最後ですけど、私も一言だけお話しをさせていただきたいと思います。

つい先日ですかね、10月31日付けの文科省の発表で、「学校における教育の情報化の
実態等に関する調査結果」というのが、これ最終確定結果なんで、その前はチラチラと

見てたんですけど、文科省も最近、全国の県をランキングするみたいなことを平気でやり始めていて、前は県の結果は出すけど、ランキングの表までは出さなかったんですけど、ランキングの表を出して、平均値はここで、それ以下の県はこうでみたいなことをさらすようになりましたですよ。私が非常にショックを受けたのは、島根県が、4つ大きな項目があるんだけど、全部大項目4つとも最下位だったですね。普及率とかですね、そういうのは別に学校の環境についてはそこそなんですけど、強いショックを受けたのは教育指導力ですね。教育指導力について大項目が4つあって、それぞれ小項目が4つずつあって、全部で16項目あるんですが、第1項目が教材の研究とか、授業の準備とか、日頃の校務とか、そういうところでICTを活用する能力についてが1点目でした。それから第2点目は、まさしく授業で、自分の授業を展開するのにICTをどれくらい活用できるかという項目でした。それから3点目が、子どものICT活用能力を指導できる力があるかという項目でした。それから4点目は、ICT活用の一番土台になっているところの知識とか、ちょっと申し上げた倫理観とかですね、ルールとかマナーとかですね、そういったものを指導する力があるかという4つの点となっております、その4点全部がですね、全国最下位というような結果で、これ非常に大きなショックを受けました。また教育学部を持つ大学として大変申し訳ない気持ちも持ちました。別に、最初に言ったように、競い合うことがいいとも思っていないですし、そういう並べ方がいいとも全然思っていないけど、ああいうふうに出してしまうと、すごくやっぱり残念だなというふうには思います。ここは、県のほうでもお取り組みのところだとは思いますが、あまり水を差すようなことは言いたくないんですけども、やっぱり何と言っても先生方の使用の力が伸びるってことが非常に重要で、子どもの指導の前に、まず自分が、自分の教育に対してICTがどういう意味を持って、何をするのかってことを、かなり積極的に考えてやっていかないとだめで、実は大学もですね、非常に大きな差がこの2年間生まれました。みんなオンラインとかオンデマンドで授業をせざるをえなかったじゃないですか。だから、オンデマンドの授業のクオリティについて学生に調査すると、とにかく、「先生によってこんなに違うのか」という話が非常に出てきますね。通常の授業でも多分そうだったんだろうなとは思いますが、ICT化によってそれが非常に如実にわかるようになってきましたですね。学生はすごい情報量をやっぱり処理しなきゃいけなくなります。オンライン授業の一番いけないところは、たくさんの授業をとれてしまう。リアルに授業をとるんだと、時間割を組み立てなきゃいけないから、この時間に二つの授業を受けることはできないんですけど、実はオ

ンラインは、いくつか複数の授業をいっぱい入れることができちゃうんで、そういうことでものすごい情報量になってきます。島大も今後2年間、できるだけ対面を進めようと思っていて、今は教室の制約がない限り対面っていうことをやっているんですけども、対面の授業にしたら学生がみんな喜ぶかっていうと、すごい文句も出るんです。学生からは、「こんな授業だったら、対面じゃなくて、オンデマンドでいんじゃないか」っていう意見がでます。で、「なんで」って聞いたら、「早送りできないから」と言うわけですよ。ね。「時間の無駄だ」と。その問題はですね、授業をする人間、授業者って何をする人なのかっていうこと。根本的に授業者とか教員って、どういう役割なのかっていうことを問われる。既に世の中に様々に転がっている知識を順番に話すだけなら、その人は多分いらなないんじゃないかというところまで来ている。実際のところ高校生でも、自分の学校のつまらない化学の授業を聞くよりは、Y o u T u b eにあがっている化学の授業のほうがわかりやすい、なんぼでもそういう人はいますよね。そうすると、授業者って何をするのかってことについて、そもそもの組み立てを考えなきゃいけないなということが一つでした。

それから2番目、少し、さっきからお話しが出たんですけど、I C Tの活用っていうのは、大学で求めているのは、自分で情報収集することや、それを分類することや、ストックすることや、そしてそれを活用して創造すること。そこへ向かって、情報を収集できる力や、もちろん検索も含めて、それを分類してストックしておく力、それを分析する力や、それを活用して自分らしい創造、クリエイションにつなげていくってことなんですね。先ほど、自分を振り返るツールとしてって話が出ましたけども、まさしくそのとおりだというふうに思っていて、やはり自分を振り返る、自分のアーカイブをどうつくるか。これだけ情報が溢れてきた時代ですから、自分の頭だけでは記憶しきれないし、非常に膨大な情報の流れを自分でコントロールする力を身に付けないと、I C Tの活用ってうまくいかないんです。それを先生が教えることがそもそもできるのか、そういう問題があるので、先生自身がそのことをできていなければ絶対にできません。これ教育の非常に大きな命題で、やらなきゃいけないとは思っているんですけど、本当難しいんじゃないかなと思う面も実際感じます。

今、2点申し上げましたが、3点目は、I C Tの活用はもう時代の流れですし、これはやっていけないと次の時代多分生きていけない、やらなきゃいけないんですけど、同時にですね、やっぱりリアルじゃないといけないものや、アナログでないといけないものって何なのかってことの価値観が、逆にわかるようなやり方をしないとだめなんですよ。

デジタルを進めることによって、リアルとかアナログっていうものにしかない価値っていうものが何なのかっていうことを、逆に子どもたちにわかり、私たちにわかりっていうことをやっていかないと、恐らく、ICTだけで全部済んでいくわけじゃ絶対にないんで、この両輪をどう使いこなしていくのかっていうことの課題になっていかないとおかしいなというふうに思いますけど、国のほうはとにかく、一人一台端末だってワーって配って、Wi-Fi普及率が何パーセントだって県に競争させてやるわけですから、これはこれとしてお付き合いしないといけないと思いますけれども、実際のところ、先生たちはそれを使って自分の教育が良くなると本当に思っているのかってことを考えると、どの先生もがその使い手になる必要はないかなというふうに私もちょっと思っていて、その先生らしい教育のやり方、自分も大事にする教育の価値、それとICTの距離感がちゃんと測れるような教員になっていくっていうのが、大事なんじゃないかというふうに思ったりもしました。

○会長

これで以上、一周させていただいたということになります。ここからはフリーなので、とりあえずICTのことを中心にお話しいただくのがいいかなと。皆さんからそれぞれ出た意見で、各委員さんのご発言に対して、お考えがあったり、こういう角度もあるんじゃないかというご意見があったら承りたいと思います。いかがでしょうか。

○委員

島根県ではICT教育の教員が本当に少ないんだということを、何度もニュースで出てたりしました。それで外部の講師とかいうようなお話が出てくるんだと思います。私も島根県の情報産業にずっと携わって、情報産業の協会もこの地域で立ち上げて、伸びてはいるので、そういったところのプログラミングのプロみたいな人たちを、現場のほうに協力してよというような呼びかけは、既に教育委員会なさっていると思うし、できるかと思えますけれど、実際ICT教育の云々って言われた時に、プログラマーが少ないんだみたいな、そういう人間を育ててくれみたいな、情報産業の要望があったりする。実際、そんなプログラマーを育てるのがICT教育でも何でもないですよ。だから本当に、プログラミングのプロを教師として現場に引っ張って来て、なんとかホッとしている、それが求められるものじゃないような気がします。プログラミングをやっている情報産業の人たちは、プログラミングそのものが仕事では全然なんでもなくて、ケーキ屋さんのケーキの売上をどうしたらいいのかっていう相談があった時に、「それはICTでこうやったらいい

んじゃないですか」みたいなことが、実際ソフトメーカーの仕事なんですよ。それはいわゆるSEという、システム全体をどう構築していくか。だから、0と1でどうのこうのみたいな、わけのわからないことを教えることが、全然ICT教育でも何でもなくて、実際現場で困っている島根県の多くの業者の方がいらっしゃって、それを現場のSEさんたちがどうそれをヒアリングして、「こういう改善になります。」「AIを使ってこうだ」とか、そういうことを目の前で子どもたちに見せて、「なるほどね」ことのほうが、はるかに価値のあることだと思います。だから、安直にプログラマーがいっぱいいるからそこに頼んでですね、「ルビーだから、まつもと（ゆきひろ）さん来てよ」みたいな、そういうことじゃなくて、まつもとさんが言いたかった、例えばツイッターの、よく彼が出す発言の中で、ツイッターが最初にスタートする時に、ルビーで書かれたんですけど、そのツイッターの最初の開発者が、「144文字でこういう文化をつくりたい。それをルビーで」ってまつもとさんに言った時、まつもとは「144文字で何をやるの？」みたいなことをその時に答えたということを言われていました。そういうことを学んでもらえるような教育のほうがもっと大切だと思います。ワードやエクセルがやれどうのこうの、ちょっとしたことが使える、そんなことなんかどうでもいいような気がしますね。だから安直にICT教育の講師として足りないからって言って、プログラマーに声をかけるっていうのはやめたほうが良いかと、私は思いました。

○会長

ありがとうございました。

ICT教育をどういう視点から行うかということですよ。子どもに何を体験させ、どういう力をつけてやるかってことが大事だっていうお話しをいただきました。

○委員

今のお話しは、すごく共感というか、そのとおりだと思っていて、高校現場では「情報I」ってものが新課程でスタートして、つい先日、大学入試センターから情報の試作問題が公表されて、入試対応をどうしていかなきゃいけないとあって、そういったことで、当然高校の先生方は気にされるんですけど、先ほどおっしゃられたとおり、プログラマーってものを育てるのが大事じゃなくって、例えば、今回の「情報I」っていう高校の新課程では、「情報デザイン」と「データサイエンス」と「プログラミング」、この3つが3本柱だっているように言われているんですけど、それって決して遠い世界の話じゃなくって、ものすごい身近なところに引き寄せても当てはまるんだよってことをよく話をするん

ですが、例えば、高校の文化祭なんかにおいて、わかりやすいデザインのポスターとか、そういったものをどうしようかって考えること、これはまさに「情報デザイン」の領域の話ですし、先ほどおっしゃられてましたけれども、例えば模擬店をする時に、売上とか利益とか、そういった収支のシミュレーションをするのは「プログラミング」の世界ですし、あとは、過去の模擬店の実績から、何時の時間帯が一番お客さんが多く来るかなっていうふうに考えるのが「データサイエンス」っていうふうに、なんとなくこの「情報 I」とか「情報」っていうものが、なんかすごい遠い世界のように我々大人が考えがちですけども、高校生の文化祭っていう、ものすごい身近なところに引き寄せて、「情報」っていうものが生きてくるんだっていうこと、こういったことをですね、しっかりと我々大人が認識を持つことがすごい大事かなというふうに思いますので、そう考えると、「探究」ですとか「情報」っていうものが学びの本当に中心にあって、その中で5教科があるような、そういったイメージを私は持っているんですけども、「情報」っていうものをどう捉えていくかってのは、ものすごく大事なことだなというふうにお話を伺っていて思ったこと。もう一つが、話題が変わってしまいますが、先ほど、学校に来れない子が I C T、スマホを使うことによって学びっていうものが保障されているというか、そういった機会があるんだってお話があったと思うんですけど、裏を返せば、「じゃあ、学校の存在意義って何だろう」っていうところだと思うんですね。やっぱり、I C Tを使えば、学校に行かなくても学びができるってことがわかったっていう、もうこれは誰もが感じていますので、そういった中でわざわざ学校に行って、教室で40人で学ぶことの価値って何だろうみたいな、こういったこともやっぱり改めて大きなところで定義づけというか、考えていく必要があるのかなというふうに、この I C Tの進展と共に、セットで考えていくべきことかなというふうに思いました。

○会長

ありがとうございます。

一つは「探究」とか「情報」っていうのが学びの中心だっていうのは、もう、大学教育もまったくそのとおりで、大学は、昔一般教養って言われていて、いわゆる教養教育って言ってましたけれども、今、「探究」とか「情報」とかいうところを、新しい大学のリテラシーとして組み立てなきゃいけないということで、島大もこの1、2年で全部、全学共通教育に模様替えしてしまうってことになっています。それから、わざわざ学校に行くことの意味というか、「学校って何だろう」ってこと自身が変わっていつているし、同時

にそれは、「先生って何だろう」ってことが変わっていったってことで、このことは教育全体にとって、やはり考えなきゃいけないテーマですよ。先生方自身がそれを考えているかなってことです。校長先生がどう考えているかなってことです。

○委員

多分、学校で受けたいろんなことが、ダメージというか、マイナスのことを若い人はいろいろ言われます。「いやな、辛い学校に行かなくてもいいんだよ」ってことは、それ知ってたら、精神科に入院していないし、薬飲まなくてよかったよねっていう。学校はなぜそういうふうであるのかっていうことを、本当に考えていただきたいし、学校に何年いて、どれだけの試験に通ってって、いったいどれだけの意味があるんだろうって、私は常に思います。うちの子なんかも中1の時から新聞配ったり、お芝居やったりですね、居酒屋で調理師もやりましたし、そういう意味では、学校に行かないでも育った子って大人ですよ。そういうところが、すごく学校教育だけで育ってる人と、どうなんだろうなど。それでまた大学に行くわけね。学生さん来られると、結構子どもっぽいと思います。そういう中でずっと親に養われながら大学に行って、上げ膳下げ膳でやっているわけ。それとうちに來る子たちのように、十いくつから、そこそこ、色んな中で働きながら、色んな人とお付き合いしながら、色んな大人と。差というか、乖離というか。どっちがどっちって言うんじゃないんですけど、何とかならないもんですかね。学生さん、子どもだと思いますよ。見ていて。

○会長

まあ、18歳は成人ですからね、そうは言ってもね。なかなか世の中の方向性とは合わないところがあるんですけど、まあそういうふうに学びの期間が長くなるってことは、それだけ要するに情報量が多いから、それをこなしていかなきゃ成人化できないのか、それとも最初から社会の中で早く教育してしまえば、もう少し成人性を育てられるんじゃないのかっていうようなテーマがあって、今冒頭でおっしゃっておられたことっていうのは、社会が教育してくれるっていう、そういう機能をすごく大切に使いながら、学校に行かない選択をした子どもたちが育っているんだよっていうお話をしてもらったので、そのことの、学校と社会の関係ってのも、考えていかなきゃいけないなというふうに思いました。

ありがとうございました。

○会長

ほかに追加のご意見ありませんでしょうか。

本当は採り上げたいテーマがすごくあって、皆さんのおっしゃっていただいたことは、僕のメモとしてはすごく大事で、知識っていうものが、体からくるところの知識っていうものと、デジタルに拾ってくる知識っていうものの深さの違いとか、そういうものが将来何に結びつくのかみたいな話もすごく大事ですし、使いこなすってどういうことなのかっていう。一人一端末ってことが大事なことではなくて、使いこなすってことはどういうことなのかっていうことについて、もう少しちゃんと考えましょうというふうにおっしゃっていただいたし、人と人のリアルな関係性とか、やっぱり人の手を通してしか得られない関係や信頼感や出会い、そういうことが子どもを支えるんだなってことも、非常に大切な視点だなと聞いておりました。

あと5分もありませんので、本日のところは、こういう意見交換ができたということで、事務局のほうにお返ししたいと思います。

以上で、議事というのは、おしまいということになります。ご協力をいただきまして、本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。